

発達障害児をもつ母親から見た夫婦間の葛藤とそれを乗り越えるプロセスの検討

○細谷萌未・金平希・#中野美奈

(福山大学大学院人間科学研究科・福山大学人間文化学部心理学科)

目的

発達障害児をもつ家族では、夫婦間の関係性が子どもの発達支援や家族機能に大きく影響するとされている。本研究の目的は M-GTA を用いて、発達障害児をもつ妻の語りから、夫婦がどのように葛藤を体験し、乗り越えていくのかそのプロセスを明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象者および調査期間 2024 年 7 月～10 月に、発達障害の親の会に所属している発達障害児 (平均年齢 28.22 歳, $SD=3.77$) を持つ妻 9 名に対して半構造化面接を行った (平均年齢 58.77 歳, $SD=3.47$)。

調査内容 調査対象者とその配偶者の年齢、就労形態、子どもの年齢・性別・診断名・出生順位、さらに夫の家事・育児の参加度を尋ねた。分析テーマは「妻から見た発達障害児をもつ夫婦間の葛藤とそれを乗り越えるプロセス」であった。インタビューガイドは山根 (2012), 小川・高木 (2018), 中野 (2014) を参考に、「子どもに違和感を持った時のエピソード」、「診断がなされたエピソード」、「子どもの幼児期～現在に至るまでの印象に残っている子どもに関わるエピソード」、「障害のある子どもを持つことによる現在に至るまでの自分・自分と子ども、自分とパートナーの関係性の変化」について尋ねるものであった。

倫理的配慮 本研究は、福山大学学術研究倫理審査委員会の承認後 (通知番号:2024-H-10 号) に実施した。

結果と考察

発達障害児をもつ妻が夫婦関係の中で葛藤をどのように体験し、どのように意味づけていくのかについて分析を行い、62 個の概念、30 個のカテゴリー、5 個の大カテゴリーが生成された。なお、文中の【】は概念、<>はカテゴリー、《》は大カテゴリーを示す。

妻は子育てをする中で<子の育てにくさ>を感じ、多くは子どもの【未来への不安】などにとらわれ、【夫への働きかけ】を行い、<動き始める>一方、夫は<楽観的態度>を示した。妻は受診・診断を経て多くが<覚悟を決める>姿を示した。一方、夫は<妻任せ><落胆的態度><予想の確信>という 3 つの反応パターンを示した。これを受け、妻は夫に対して【具体的指示】や【情報共有】、【方針の主張】、【支援参加の巻き込み】といった<直接的>、又は【夫と子の橋渡し】や【妻の頑張りを見せる】といった<間接的>に《巻き込み的働きかけ》を行った。その結果、《巻き込まれ》た夫は、【支援に参加】し、<妻に従う>行動を示すようになり、専門家や他家庭との関わりを通じて《体験からの学び》を得ていた。また夫が<妻の働きを評価する>ことで、<妻に従う>という循環が生じていた。一方で、一部の夫は<巻き込まれへの回避>を示し、その場合、妻は《期待を手放し》ていた。こうした関わりを過程を経て、妻が<夫の頑張りの評価>や<子どもの社会適応の実感>を得ると、【二人三脚の気づき】や夫を【身近な相談者】と捉え、<夫婦関係の納得>に至っていた。これに対し、《期待を手放し》た妻は、【独立心の確立】や【卒婚の可能性】を感じ、<夫婦関係への手放し>に至っていた。この過程は、夫婦が親になる過程で感じる葛藤のプロセス (大島・鈴木・西村, 2022) と一致していることから、子どもの障害の有無に関わらず夫婦は同様の過程をたどることが示唆された。

なお、妻が早期に<動き始め(る)>、夫が妻の話に耳を傾け、育児に《巻き込まれ》る夫婦は関係良好に繋がりやすい一方、妻からの働きかけに対し、夫が共感を示さず、回避する夫婦は葛藤を感じやすいことも示唆された。これは森田・渡邊 (2024) の夫婦間のコミュニケーションにおいて接近・共感的態度は夫婦関係満足度を高めるのに対し、回避的態度は満足度を低下させることと関連していることが考えられる。